

安積高等学校創立百三十周年記念式典 校長式辞

平成二十六年九月六日（土）

九時三十分

安積高等学校第一体育館

式 辞

ここ安積野にも秋の爽やかな気配が漂う今日の佳き日に、文部科学大臣下村博文様を始め、多くの御来賓の皆様方に御臨席いただき、創立百三十周年記念式典を挙行できますことは、教職員・生徒一同この上なき喜びであり、深く感謝申し上げます。

明治十七（一八八四）年、二十二歳の森鷗外がドイツ留学へ旅立ったのがこの年でありますが、本校は福島県福島中学校として歩み出し、明治二十二年には、福島から当時の安積

郡桑野村の新校舎、現在の安積歴史博物館に移転し、以来、約三万三千名の有為の人材を世に送り出し、今日まで百三十年の長きに亘って先導的役割を果たしてまいりました。卒業生は、エール大学教授を務め、世界平和こそが人類の永遠のテーマであることを生涯訴え続けた、国際的な歴史学者朝河貫一博士を始め、全国でも四校だけと聞いておりますが、芥川賞作家を三名輩出するなど、様々な分野で活躍されてきました。

その間、まさに二十一世紀が動き出した

平成十三（二〇〇一）年に、男女共学化という大きな動きがありました。が、本校の生徒達は「開拓者精神、質実剛健、文武両道」の「安積の精神」を常に先輩達から学び取りながら、時間や言葉・記憶を共にし、「安積」という学校文化を三年間共有して、まさに安高生の矜持・プライドを身につけ、伝統を築き上げてきたのだと私は考えます。

その中で、安高生は、安積の精神と伝統をただ受け継ぐだけではなく、明治・大正・昭和、そして平成の各時代背景の下、

「真の安高生は如何にあるべきか」「安積ら

しきとは何か」を絶えず自らに問いかけて検証し、自主自律の精神のもと、新たな伝統を創造してきたのであります。また、「安積の精神」の中でも**開拓者精神**は、大きな困難に立ち向かい自分の人生を切り拓いていくということだけではありません。つまり、自分がしたいことを貫くことに加えて、大震災後のふくしま、日本、そして人類のために、「熱誠事に当たりなば」、熱き誠の心をもつて事に当たろうという高き志を掲げて、夢に向かって進んでいくこと、それが安積の開拓者の真の姿と言えるでしょう。

ところで、今春本校に入学した百三十期生は、大震災の発生から間もない、重苦しく不安な空気が漂う春に中学校に入学して、大変厳しい三年間を過ごしました。あの「三・一一」の大地震・大津波と、それに続く東京電力福島第一原子力発電所の事故は、多くの日本人の価値観を変えるほどの出来事でした。間もなく迎える本校の創立記念日九月十一日で三年六か月が経過しますが、果たして私たちの社会は変わるべき方向へ向かっているのでしょうか。私たちは、「日本は、そして世界はこのままではよいのか、

どう在るべきか」という本質的で非常に大きな難問にこの先ずっと、正面から向き合っていく必要があるのではないでしょうか。福島の子どもたちの多くが、未だに県内外で避難生活を強いられ、復興はまだまだこれからという厳しい現実があります。一方で、福島県で生活を続けていながらも、大震災の記憶が少しずつ薄れていく現実を垣間見る時、「三・一一」を決して風化させてはならないとの思いを強くしています。

歌人と謝野晶子は、次のような短歌を残しました。

劫初よりつくり営む殿堂に

われも黄金の釘一つ打つ

遠い遠いこの世界の初めから人間は、文化遺産ともいうべき文芸・文学という無形の殿堂を営々として築き上げてきたが、自分も釘一本なりと打ち込み、さきやかではあるがその営みに参画したい。それも、ありきたりの鉄の釘ではなく光り輝く黄金の釘を。

私は、本校一期生高山樗牛の時代から、現在の一年生である百三十期生に繋がる安積の先輩達が営々と築き上げてきた大きな殿堂が安積高校である、と捉えています。

気宇壮大な与謝野女史の足元には及ばなくとも、安積という殿堂に集う私たち教職員・生徒が、一人ひとり持つてゐる釘をしつかりと打ち込み、この殿堂をより高く、より大きくしていきたいと考えております。その釘は、プラチナかも知れないし、或いは鉄や木製のものもあるかも知れませんが、この殿堂のどこかに打ち込む場所が、釘がぴったりと収まる場所が必ずあるはずで。仮に、在学中にうまく釘を打ち込むことができなかったとしても、大震災の経験をしつかり踏まえて、生涯に亘って知性を磨き続けることによつ

て、安積という殿堂を確固たるものとすることが出来るはずであります。

こうして、百四十年、百五十年の時を経た未来の安積の殿堂を見据えながら、教職員、生徒一同が力を合わせて、安積の良き校風と伝統を更に揺るぎないものとし、校歌にもあるように「七州の覇」と称えられるに相応しい安積高校にしていくことを改めて決意するとともに、安積桑野会の同窓生を始め、今まで安積を支援していただいた全ての皆様に感謝の気持ちを捧げ、式辞といたします。

平成二十六年九月六日

福島県立安積高等学校長

久保田範夫